活力と笑顔あふれるまちを目指して

令和７年度 市長施政方針

平成29年４月に山陽小野田市長という重責を担ってから、早いもので２期８年が過ぎました。１期目においては、平成30年度から12年を計画期間とする第二次総合計画を策定し、「活力と笑顔あふれるまち　スマイルシティ山陽小野田」の実現に向けて取り組んでまいりました。また、「協創」という言葉をみなさまにお示しし、「協創によるまちづくり推進指針」としてお伝えするとともに、これを具現化する施策を進めてきました。

２期目においては、新型コロナウイルス感染症への対応が緊急の課題として迫る中、市民のみなさまに寄り添い、大切な命と暮らしを守る施策を展開していくことで、逆にみなさまとの距離が縮まったと感じています。「協創」の理念を共有できたからこそ乗り越えることができたと強く思っています。

次に、「協創」の考えが具現化した事業を二つご紹介します。一つ目は、日本初の取組であるLABVプロジェクトの「Ａスクエア」です。官民連携で取り組む“仕組み”に全国から注目が集まっています。

二つ目は、地区運営協議会（RMO）の取組です。各協議会では「地域づくり計画」が策定され、様々な事業が行われています。引き続き円滑な運営と取組をサポートしてまいります。

人口減少をはじめとする資源制約下における地方公共団体の使命は、持続可能なまちをつくることに収束されると考えます。そのためには、官民連携の推進と関係人口の創出が重要であり、戦略的に取り組んでまいります。

３期目の任期におきましては、「協創によるまちづくりの実践」のため、重点的に取り組む三つの柱を掲げました。

一つ目は「活力あふれるまちへ」です。災害に強いまちづくりや空家等対策、デジタル化の基盤整備を通じて持続可能な地域経済の活性化を図ります。

二つ目の「笑顔に出会えるまちへ」では、健康寿命の延伸を目指す「スマイルエイジング」を引き続き推進します。また、ガラスやレノファ山口に代表される文化・スポーツの取組を充実させ、スマイルプランナー制度や市民活動センターといった「協創」の仕組みを活用し、多様な主体の活動を積極的に支援します。そのほか、きらら交流館のリニューアルなど、交流人口の増加に向けた取組を推進します。

三つ目の「魅力と希望に満ちたまちへ」では、暮らしやすい住環境や豊かな自然といった本市の資源を磨き上げ、広く発信して人口減少を食い止めます。さらに小中学校のトイレの洋式化を今後おおむね５年を目標として100％充足できるよう取組を加速することやICT環境の整備、そして厚狭高校南校舎跡地への新キャンパス構想など“知の拠点”として発展を続ける山口東京理科大学との連携を深め、未来に向けて希望あふれるまちに育てる取組を進めます。

今年度策定作業を進める令和８年度からの第二次総合計画後期基本計画においても、これら三つの柱を重点施策として掲げる予定です。

これからの４年間は、「山陽小野田市を未来に向けて持続可能なまちに育てる」大切な４年間と考えます。

私は、「持続可能なまち」とは、市民のみなさまがまちの未来に「希望」をもち、日々の暮らしに「希望」をもつことができる「まち」と考えます。新たな３本柱において「魅力と希望に満ちたまち」を掲げたのはその考えに基づいています。

経済学者の玄田有史氏がその著書「希望のつくり方」の中で「希望を持つためには、きびしい現実から目を背けないことが重要であり、過去から現在まで続いている挫折や試練を正面から受け止めることで、その状況を変えるんだという思いが生まれる」と述べています。これは、現在の山陽小野田市を未来に向けて「変化」させていく「心構え」を端的に表しているのではないか、と考えます。

多くの団体、市民のみなさまのご理解、ご協力を得て、全小学校区で地区運営協議会の取組をスタートできました。多くの方々が主体的に自ら考え、汗を流し、熱い思いをもって地域を支える仕組みがスタートし、特色ある取組も始まっています。

市長３期目を迎える私に課せられた使命は、「協創」のパートナーである市民や企業、団体、大学などのみなさまと一層力を合わせ、正に「一円融合」によって資源制約下の行政運営の課題を共有し、解決に向けてともに行動することで山陽小野田市を未来に希望のもてるまちに育てていくことだと考えます。

６月市議会定例会の演説より抜粋